

龍山文化後期における玉器のひろがり

——陝北出土玉器を中心に——

岡村 秀典

はじめに

中国殷周時代の祭祀儀礼のなかで、玉器は青銅器とならぶ重要な役割をもっていた。一九七〇年代以後、中国の各地で考古学調査がすすむことによって、玉器の起源が新石器時代にさかのぼることが明らかになり、なかでも良渚文化における玉璧や玉琮などの玉札器とそこにほどこされた神像や獣面紋の発見によって、玉札器の源流がはるか紀元前三〇〇〇年ころまでたどれることになった。その後、山東龍山文化や石家河文化（湖北龍山文化）、客省莊第二期文化（陝西龍山文化）などの遺址で採集されていた玉器について、林巴奈夫氏は良渚文化と二里頭文化との間をつなぐ資料として着目し、これを「龍山晩期」と呼んで詳細な検討をおこなったが^①、一九九〇年代にはいって、考古学的な発掘例の増加

とともにその年代や遺址の性格がしだいに明らかになってきた。

この紀元前二〇〇〇年前後の玉器は、二里頭文化以後の玉札器に直接つながるだけでなく、龍山時代の土器^②に示される地域的な文化の範囲をこえて、広域のひろがりをもっている。たとえば、山東龍山文化の玉器紋様は、同時期の石家河文化のそれと共通し、凸線で表現される手法にも同じ特徴があらわれている。また、神面や鳥形など石家河文化に特徴的な玉器のいくつかはその時間と空間をこえて中原の殷墓や西周墓から出土し、さらに遠く一〇〇〇 kmほど離れた陝西省北部（陝北）からも出土している。陝北の玉器はすべて採集品のため、その年代を正確に決めることはできないが、後述のように、遺址は石家河文化とほぼ同時期に併行するものと考えられる。このような玉器のひろがりの背景には、

(1) 玉器そのものの移動、(2) 玉器工人の移動、(3) 玉器の技術

の伝播や形の模倣、などが想定されるが、玉の産地同定を目的とした鉱物学的な分析がすすめられているとはいえず、玉器の製作地を確かめることはひじょうにむずかしく、その検討はなお考古学的な方法によらざるをえないのが現状である^③。

わたしは一九九四年以来、長江中流域の屈家嶺・石家河文化の城郭遺址を調査するなかで、湖北省天門市石家河遺址や荊州市陰湘城遺址などの城郭遺址の近傍から出土する石家河文化の玉器についても検討を重ねてきた。そして、一九九八年三月、それに関連して陝西省神木県石峁遺址で採集された玉器を調査するとともに、同じように外来系統の玉器が採集されている延安市蘆山峁遺址の踏査をおこなった^④。石峁遺址の鷹形玉斧と玉虎頭については長江中流域の石家河文化で製作され、中原をへて陝北にもたらされたという考えを、香港中文大学での玉器の国際会議ですでに発表している^⑤ので、ここではこれまで日本では十分な認識をもたれていなかった陝北の玉器とその遺址について紹介し、あわせて紀元前二〇〇〇年前後における玉器のひろがりについて検討してみたいとおもう。

① 林巳奈夫『中国古玉の研究』（吉川弘文館、一九九一年）。

② 龍山文化とは、黄河中・下流域における新石器時代後期（紀元前三〇〇〇年紀後半）文化の総称であり、こんにちでは土器様式の地域的

な差異によって山東龍山文化や中原龍山文化などの地域文化が設定されている。そのいっぽうで前三〇〇〇年紀には、黒陶・灰陶のひろがりとともに、銅器・玉器・城郭の出現などの通文化的な変化がみられることから、最近では前三〇〇〇年紀前半の廟底溝第二期文化や良渚文化、屈家嶺文化などの諸文化をふくめて龍山時代と呼ぶことが多い（厳文明「龍山文化和龍山時代」『文物』一九八〇年第六期）。つづく前二〇〇〇年紀前半の二里頭文化の時代には、洛陽を中心とする二里頭文化のほかに、山西西南部の東下馮文化や山西中部の東太極文化など多くの土器文化が設定され、近年の中国ではこれを夏時代と呼んでいる。しかし、伝説の夏王朝の時空的位置づけがむずかしく、龍山時代にならって二里頭時代と呼ぶべきであろう。

③ これまでは「影響」や「交流」などの曖昧な言葉で玉器のひろがりをも説明することが多かったが（たとえば良渚文化の玉琮・玉璧を論じた Tsui-Mei Huang, Liangzhu: A Late Neolithic Jade-yielding Culture in Southeastern Coastal China, *Antiquity*, Vol. 66, 1992, 75-83 など）、むしろ玉器の生産と流通の実態を明らかにする努力が必要であろう（岡村秀典「中国先史時代玉器の生産と流通」『東アジアにおける生産と流通の歴史社会学的研究』、中国書店、一九九四年）。

④ 平成九年度文部省科学研究費（国際学術研究）による調査。調査には京都大学大学院生上野祥史君の協力をえた。

⑤ 岡村秀典「公元前二千年前後中国玉器之拡張」〔『東亞玉器 (East Asian Jade: Symbol of Excellence)』第一巻、香港中文大学、一九九八年〕。『東亞玉器』は一九九八年一月に香港中文大学中国考古芸術研究センターが主催した第三回南中国及隣近地区古文化研究会議にあわせて公刊された論文集（第一・第二巻）と図録（第二巻）である。この会議では中国各地の玉器にかんする最新の情報が集められ、小論はそれに負うところが大きい。

一 延安市盧山峁遺址とその玉器

1 遺址

延安は一九三七年から一九四七年まで中国共産党が対日戦争と内戦を指揮してきた革命の聖地として知られている。黄河支流の延河が厚い黄土高原を切り刻む典型的な「溝壑地貌」地帯で、平野はほとんどない。盧山峁遺址は、延安市の北約一〇kmの碾莊郷盧山峁村に位置し、標高は二二〇〇mあまり（図1）。市の中心から村までは車で一時間、ここまで外国人が足を踏み入れたことはかつてなかったという。こんにちの住居は、すべて黄土の斜面に横穴を穿った窑洞で、交通や水の便のため狭い谷底に一軒ずつ点在している。三月というのに谷の水は凍ったままで、荒涼たる黄土の斜面が道の両側にせまっている。先史時代の遺址は谷奥の河床から急斜面を一五〇mほど登った尾根上の南斜面にひろく分布し、山頂からは黄土高原の山並みが遠くまで見渡せる。盧山峁の「峁」は陝北の方言で「山頂」を意味する。山頂まで果樹園の段々畑がつづき（図2）、東西に連なった尾根上には縄紋や籃紋（平行タタキ目）をもつ灰陶や紅褐陶などの土器片が散布しているほか、断崖の各所に住居址の石灰面や灰坑が露出している（図3）。表土の流出による遺址の破壊がいちじるしく、近年の開墾

がそれに追い打ちをかけている。黄土高原地帯では紀元前三〇〇〇年紀に住居の床面や壁面に石灰を塗布した窑洞が出現するが、この遺址は龍山時代の山西省石楼県岔溝遺址のような丘陵斜面に窑洞式住居が分散する集落と考えられる^①。

盧山峁遺址が注意されるようになったのは、村民がここで採集した玉器を一九八一年に延安市にもたらしてからのことである。ただちに延安市文物管理委員会の姫乃軍氏らが踏査をおこない、

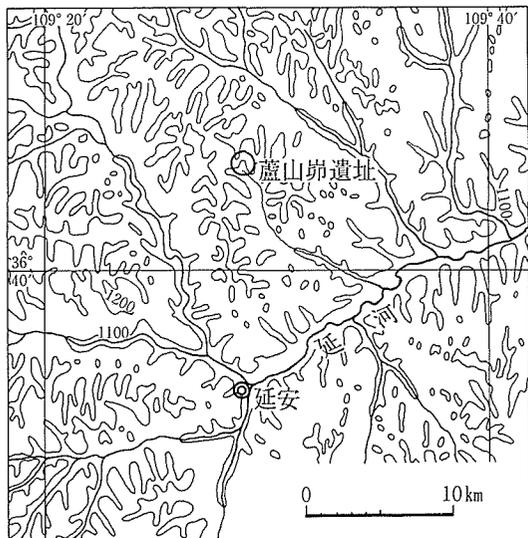


図1 盧山峁遺址の位置



図2 蘆山峁遺址の遠景（東から）



図3 断崖に露出した灰坑

その玉器を『文物』誌上に紹介した。その報告のなかで姫氏は、徴収した二三点の玉器は村民が解放前後と一九六六年前後に尾根上の数ヶ所から採集していたもので、付近一帯には龍山文化後期の土器片が散布しているものの、玉器の年代は専門家の意見にしたがって西周時代に比定した。この報告が研究者の注目するところとなり、姫氏はふたたび遺址を踏査して収集した玉石器と土器について新たに報告するとともに、既往の玉器についても独自の検討をすすめる、その年代を龍山時代に修正した。③ 姫氏の話によると、その後、一九九二年に陝西省考古研究所が遺址の北側で試掘をおこなったが、遺址の破壊がいちじるしく、みるべき成果はえられなかった。また、北京から張忠培氏らが訪れ、土器のなかには龍山時代のほか二里頭時代に下るものがふくまれていることを指摘したという。玉器は居住区から少し離れた墓地から出土した可能性があるものの、遺構の状況を知る手がかりが少なく、その年代をふくめて今後の調査にゆだねざるをえない。

収集された玉器には琮、璧、環、有孔斧（鉞）、石庖丁形刀、筭など二八点がある。このうち石庖丁形刀は、長さ五四・六cmの長大な玉刀で、七孔をもち、両短辺に歯牙状の凹凸がある。すでに林巴奈夫氏や楊美莉氏の注目するところとなっているので、ここではそれ以外の玉琮と玉璧をとりあげてみよう。④

2 玉琮

琮とは、方柱の上下が円筒形に削られ、中央に円孔が貫通している玉器をいう。蘆山崩遺址からは二点の玉琮が出土し、これを中心に玉琮A・玉琮Bとする。玉琮A（図4の1）は、褐色の斑紋が混じる緑色の玉で、高さ四・一cm、外径七・一cm、内径六・四cm。外径にたいする内径が大きいため、器壁が薄いのが特徴である。方角部に上下二段にほどこされた獣面紋は、凸線状の浮き彫りであらわされた「臣」字形の目の輪郭に稚拙な円形の眼球を刻み、凸帯状の長い口をもっている。しかし、左右に隣りあう獣面紋が上下逆向きになり、卵形の目をもつ同形の獣面を上下二段に重ねていることが特異である。

玉琮B（図4の2）は、褐色の斑紋が混じる淡黄緑色の玉で、高さ四・四cm、外径七・〇cm、厚さ〇・三cm。玉琮Aと同じように内径が大きく、器壁が薄い。横断面は隅丸方形で、上部のみわずかな円筒部の削りだしがある。方角部には上下二段に簡略化した獣面紋があり、管状工具の回転によって円い目を陰刻している。上段の獣面は凸帯状の冠と口をもつのにたいして、下段の獣面には冠の凸帯がない。このような特徴は良渚文化の玉琮と一致する。また、下の円筒部の削りだしがなく、獣面紋の口のすぐ下が底面になっているのは、長い玉琮をここで分割したためかもしれない。



図4 蘆山崩の玉琮（良渚型）

縦に四つに割れたために、それぞれの割れ口に二対の補修孔をあけている。

玉琮は、紀元前三〇〇〇年ごろ長江下流域の良渚文化に出現し、高さが低くて獣面紋の精緻なものから（図5の1・2）、長大で節の数が多く、獣面紋の簡略化したもの（図5の3・4）に変化していった。その最終段階は前五〇〇年ごろで、このような良渚文化の玉琮は獣面紋をもつのが特徴で、これを良渚型玉琮とする。

良渚文化の終焉から少し時間をおいた龍山文化後期に、黄河中流域と長江中流域に中原龍山型玉琮が発現する。山西省襄汾県陶寺遺址では一三

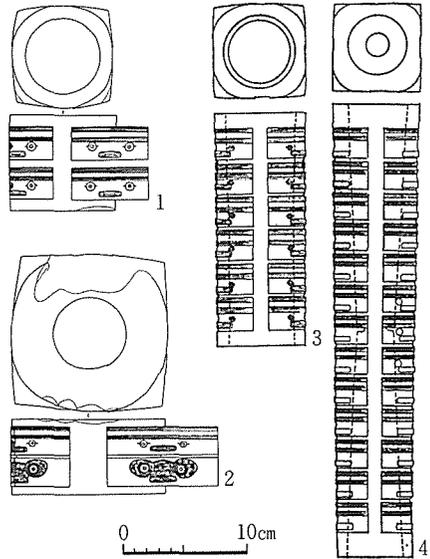


図5 良渚型玉琮 (1・2 浙江瑤山M12, 3・4 江蘇寺墩M3)

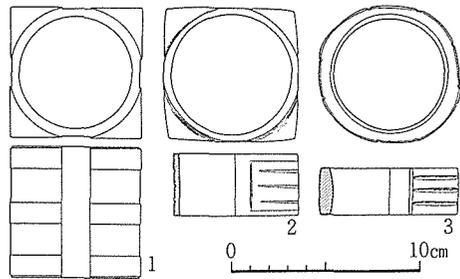


図6 中原龍山型玉琮 (1 湖南度家崗, 2 山西陶寺M3168, 3 山西陶寺M1267)

基の墓から一点ずつ玉琮が出土し、年代のわかる墓はいずれも龍山文化後期に属している。玉琮の外形には方柱形と凹柱形とがあり、高さは二―五cmの小型のものが多く、三一六八号墓の例(図6の2)は、器壁が薄く、方角部には横に三条の凹線をほどこしている。一二六七号墓の例(図6の3)は、凹筒形の玉琮で、縦の凹線で四方を区画し、そこに三条の横線を刻んでいる。

長江中流域の石家河文化後期の例として、湖北省荆州市陰湘城遺址に近い棗林崗四一號壘棺墓の玉琮^⑦は、高さ三・五cmの方柱形で、方角部に三条の凹帯をほどこしている。また、湖南省安鄉県

の形態情報が中原に伝播し、独自に模作されたものであろう。長江中流域の石家河文化後期は、北から中原龍山文化の影響がだいに強まると同時に、屈家嶺文化以来の在地的な土器様式が変質し、石家河を中心とする城郭集落が解体をむかえる時期であり、この段階に突如として出現した玉琮は、その特徴が同時期の陶寺遺址のものに類似することからみて、良渚文化からの直接的な影響ではなく、中原を経由した間接的な影響によって生まれたものと考えられる。これを中原龍山型玉琮にふくめる所以である。

度家崗で採集された玉琮^⑧は、高さ七cmの方柱形で、方角部に四条の凹線をほどこし、三条の低い凸帯を削りだしている(図6の1)。

このような陶寺遺址や長江中流域から出土した中原龍山型玉琮は、良渚型玉琮に後出するもので、凹線や凹帯の簡単な紋様をほどこし、小型で器壁が薄い特徴をもっている。良渚型玉琮

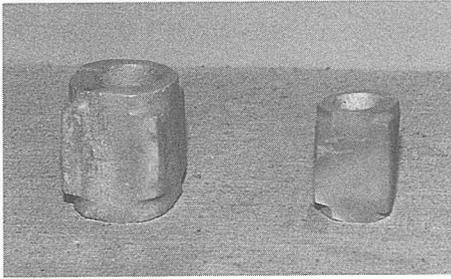


図7 齐家型玉琮（寧夏自治区採集）

黄河上流域の齐家文化には、細長い方柱部の上下に長めの円筒部を削りだした玉琮が知られ、寧夏自治区で採集されたものを図7に示す。龍山文化後期よりやや後出し、紋様をもたない素朴な省華県梓里遺址から出土した玉琮は、報文から判断するとこの型式に属すようであり、陝西省長安原上泉村で採集された玉琮も典型的な齐家型であるから、東は関中盆地までおよんでいることがわかる。地理的な位置からみて、齐家型玉琮は中原龍山文化の影響を受けて独自に模倣されたものと考えられる。

新石器時代の玉琮は、以上のような良渚型、中原龍山型、齐家型の三型式に大別され、この順に年代的な系譜と東から西への地理的な推移をたどることができる。このなかで陝北の蘆山峁遺址から出土した玉琮は、どのように位置づけられるのだろうか。まず、その玉琮A・玉琮Bは、ともに獣面紋をもつ良渚型に分類

される。そのうち玉琮Bは、紋様構成や目の回転施紋などの技術的特徴が良渚文化の玉琮と同じであるところから、長江下流域で製作され、一〇〇〇km以上も離れた陝北にもちこまれた可能性が高い。いっぽうの玉琮Aは、獣面表現が稚拙なうえ、卵形の目をもつ同形の獣面を上下二段に重ね、左右に隣り合う獣面が上下逆向きになっているところが良渚型玉琮の原則からはずれており、良渚文化の所産というよりも、それ以外の地域で良渚型玉琮を模倣したものと考えられる。それが中原で製作されたか否かはわからない。しかし、その模倣の度合いは中原龍山型玉琮よりもはるかに良渚文化のものに忠実であり、良渚型玉琮の手本を横にみながら模倣したことはまちがいない。玉琮Bのように良渚型玉琮は良渚文化の外にまで運ばれていたから、手近なところにモデルがあった可能性があり、模倣をくりかえすなかで、より簡略化した中原龍山型玉琮が生みだされたのではなからうか。良渚型と中原龍山型との型式と空間上の懸隔は、蘆山峁の玉琮の発見によってだいぶ縮まったとみてよいだろう。

3 玉璧

璧とは、中心に円孔のある円盤状の玉器をいう。蘆山峁遺址からは四点以上の玉璧が出土し、そのうち三点の状況が判明してい

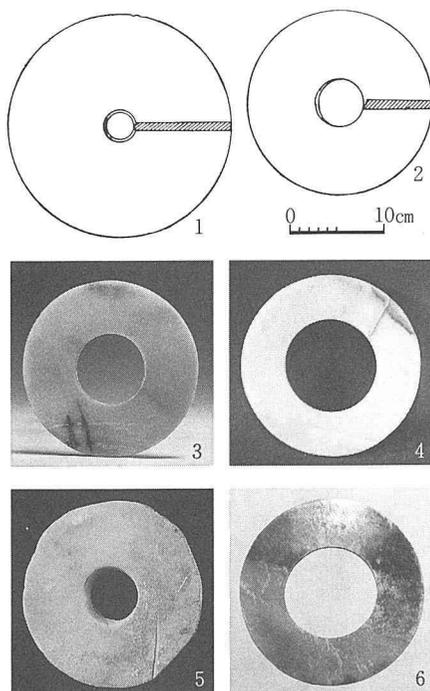


図8 良渚型(1・2)・中原龍山型(3・4・6)・齐家型(5)玉璧(1・2) 江蘇寺墩M3, 3・4・5 陝西蘆山峁, 6 山西陶寺M1423)

玉璧は正円形を呈し、内縁と外縁の厚さがほぼ均一な板状で、周縁の稜角がはっきりしているのたいていして、紅山文化の玉璧は外形と孔が不整形で、周縁が刃状に薄くなっていることから、それぞれの地で独自に生成した可能性が大きい。

良渚文化の玉璧について、詳しい報告のある江蘇省武進県寺墩三号墓^⑩を例にみておこう(図8の1・2)。ここからは計二四点の玉璧が出土し、外径は一六・四―二六・二cm、孔径は三・二―四・九cm、厚さは〇・七―二・五cmである。外径にくらべて孔径が小さいこと、板状で厚みがある

る。玉璧A(図8の3)は、褐色の斑紋がはいった淡緑色の玉で、正円形を呈し、外径一六・九cm、孔径六・七cm、厚さ〇・四五cm。玉璧B(図8の4)は、周縁に褐色斑のある黄緑色の玉で、正円形を呈し、外径一一・一cm、孔径六・八cm、厚さ〇・五cm。玉璧C(図8の5)は、乳白色に変色した黄褐色の玉で、外径一八・五cm。周縁がいびつで、中心の円孔は片面から穿孔している。

玉璧は、紀元前三〇〇〇年ごろ、長江下流域の良渚文化や遼河上流域の紅山文化に相次いで出現する。玉琮とちがって玉璧は形が単純なため、その系譜を追うことはむずかしいが、良渚文化の

こと、両面穿孔していることが特徴である。良渚文化のなかでも地域や時期による変異がみられるけれども、つぎに述べる中原龍山型と区別するために、とりあえずこのような玉璧を良渚型としておこう。

中原では山西省襄汾陶寺遺址から八〇点あまり出土し、時期の確実なものすべて龍山文化後期の墓に副葬されたものである^⑪。その特徴は、正円形を呈し、外径は最大のが二二・五cm、最小のものが七・二cm、多くは一〇―一五cmである。中央の孔径が比較的大きく、多くは六―七cm、およそ外径の三分の一から二分

の1の大きさになる。厚さは〇・二―一・一cmで、多くは〇・五―〇・八cmである。実見した一四二三号墓の例（図8の6）は褐色の斑紋のある淡黄緑色の玉で、外径一二・四cm、孔径六・一cm、厚さは〇・二cmとひじょうに薄く、片面穿孔か両面穿孔かは判別できない。Ⅱ区墓地で採集された玉璧もこれに類似し、孔径が大きく、厚さは〇・二cmである。このように陶寺遺址の玉璧は、良渚型とくらべると小型で、孔径が大きく、薄いのが特徴であり、時期も後出するので、これを中原龍山型玉璧と呼んでおこう。陶寺遺址では玉琮と同じ時期に出現していることから、良渚文化の影響を受けて模作されたものではなからうか。^⑭

黄河上流域の齐家文化にも多数の玉璧があり、発掘品はすでに数百点にも達するというが、正式の報告がほとんどなく、これまで十分に認知されることがなかった。上海博物館の黄宣佩氏によると、玉塊から璧の厚さ分だけ板状の材を挽き切り、片面から穿孔ののち、周辺を凹形に近くなるように角の切り落としと研磨を加えているため、周縁の端面には異なった方向に研磨された小さな面がみられ、外形がいびつになっているという。^⑮台北故宫博物院に収蔵する玉璧^⑯はその典型で、外径三八・七―三九・五cm、孔径六・四―六・六cm、厚さ一・二―二・二cmといういびつさである。寧夏自治区で採集されたものを図9に示す。総じてみると、

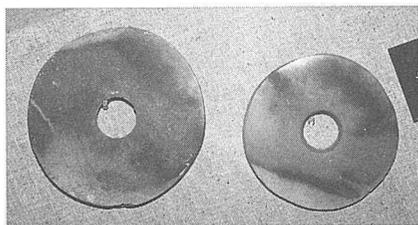


図9 齐家型玉琮（寧夏自治区採集）

外形が不整形、孔径が小さい、片面穿孔、という特徴があり、これを齐家型玉璧と呼ぶことにする。客省莊第二期文化の陝西省臨潼康康家遺址から発掘された玉璧は、図が発表されていないが、外径二〇・八cm、孔径四・四cm、厚さ一・一cmという法量から判断すると齐家型に属すようであり、玉琮と同じように齐家文化と客省莊第二期文化との近い関係をうかがわせる。

以上のように新石器時代の玉璧を良渚型、中原龍山型、齐家型の三型式に大別し、この順に年代的な系譜と東から西への地理的な推移をあとづけた。それは玉琮のあり方と同じである。蘆山峁

の玉璧のうち玉璧Aと玉璧Bは、小型で、孔径が大きく、薄いという特徴から中原龍山型に分類されるいっぽう、玉璧Cは不整形な外形で、孔径が小さく、片面穿孔であるところからみて齐家型に属すものと考えられる。蘆山峁遺址の土器は客省莊第二期文化にふくまれることからすれば、そこから齐家型玉璧が出土していても不思議ではない。また、蘆山峁と陶寺遺址との距離は二〇〇kmほ

どで、おそらく陶寺遺址を中心とする山西西南部を通じて中原龍山型玉璧が流入したのであろう。このように蘆山峁の玉璧には一系統あり、いずれも龍山文化後期のうちに陝北に流入したものと考えておきたい。

- ① 中国社会科学院考古研究所山西工作隊「山西石樓岔溝原始文化遺存」(『考古學報』一九八五年第二期)。わたしの分類では分散型集落にあたる(岡村秀典「中原龍山文化の居住形態」『日本中国考古学会会報』第四号、一九九四年)。
- ② 姫乃軍「延安市発現の古代玉器」(『文物』一九八四年第二期)。
- ③ 姫乃軍「延安市蘆山峁出土玉器有關問題探討」(『考古与文物』一九九五年第一期)。
- ④ 林巴奈夫「関于偃師二里頭遺址発現的玉器」(国立台湾大学美術史研究集刊』第三期、一九九六年)、楊美莉「中国古代的『玉兵』」(『故宫文物月刊』第一四卷第二号、一九九六年)、楊美莉「多孔石、玉刀的研究」(『故宮學術季刊』第一五卷第三期、一九九八年)。
- ⑤ 良渚文化に玉珠を分割した例が知られている(今井晃樹「良渚文化の地域間関係」『日本中国考古学会会報』第七号、一九九七年)。
- ⑥ 高燁「陶寺文化玉器及相關問題」(『東亞玉器』(East Asian Jade: Symbol of Excellence)』第一卷、香港中文大學、一九九八年)。
- ⑦ 院文浩「石家河文化玉器概論」(『故宮文物月刊』第一五卷第五期、一九九七年)。
- ⑧ 何介鈞「湖南史前玉器」(『東亞玉器』(East Asian Jade: Symbol of Excellence)』第一卷、香港中文大學、一九九八年)。
- ⑨ 黃宣佩「齊家文化玉礼器」(『東亞玉器』(East Asian Jade: Symbol of Excellence)』第一卷、香港中文大學、一九九八年)。

- ⑩ 歴史系考古專業七七級實習隊「陝西省華縣梓里村発掘収獲」(『西北大学学报』(哲学社会科学版)』一九八二年第三期)。
- ⑪ 戴応新「神木石峁龍山文化玉器探索(一)」(『故宮文物月刊』第一卷第五期、一九九三年)。
- ⑫ 南京博物院「一九八二年江蘇常州武進寺墩遺址的発掘」(『考古』一九八四年第二期)。
- ⑬ 高燁 注⑥論文。
- ⑭ 河南省孟津県妣螺二号住居址から出土した石璧は、青砂岩製で、外径が二〇cmと大きく、写真でみると、孔径が小さく厚みがあって、良渚型玉璧に近い形である(河南省文物管理局ほか「黄河小浪底水庫文物考古報告集」、黄河水利出版社、一九九八年)。遺址の年代は王湾第二期文化というから、前三〇〇〇年紀前半の良渚文化に併行する時期で、陶寺遺址の玉璧よりずいぶんさかのぼる。
- ⑮ 黃宣佩 注⑨論文。なお、齊家文化の玉璧に最初に注目したのは、楊美莉「大漠孤烟直長河落日円」(『故宮文物月刊』第一卷第一期、一九九四年)であろう。
- ⑯ 岡村秀典「11 玉璧」(『故宮博物院 13 玉器』、日本放送出版協会、一九九九年)。
- ⑰ 陝西省考古研究所康家考古隊「陝西臨潼康家遺址発掘簡報」(『考古与文物』一九八八年第五・六期)。
- ⑱ 本章に述べる陝北の神木峁石峁遺址から玉璧が一点出土し、外径一四・〇cm、孔径六・五cm、厚さ〇・三cm、その北二五kmに位置する新華遺址からは玉璧が一点採集され、ひとつは外径一一・六cm、孔径六・三cm、厚さ〇・三cm、もうひとつは外径一〇・五cm、孔径六・〇cm、厚さ〇・三cmを測る(戴応新「神木石峁龍山文化玉器探索(完結篇)」『故宮文物月刊』第一卷第一〇号、一九九四年)。三点すべて中原龍山型玉璧に属し、陝北ではそれが主体を占めたことがわかる。

二 神木県石峁遺址とその玉器

1 遺 址

神木県は陝西省の最北部に位置し、北は内蒙古オルドス高原に接している。遺址は神木県の南六〇km、高家堡郷石峁村にあり、遺址の西南部には戦国・秦代の長城が遺存している。秃尾河支流の洞川溝に臨む丘陵の尾根上に立地する環境は、蘆山峁遺址とよく似ている。ただ、強い風食・浸食作用によつて表土が流出し、石峁の名のとおり山頂には岩盤の露出がはなはだしい。榆林から神木をへて府谷にいたる道路が眼下の洞川溝に沿つて通じており、交通の要衝にあることがわかる。

石峁遺址は、一九七六年に発見され、翌年に陝西省考古研究所の戴応新氏はその踏査の概要を報告した。そのなかで戴氏は、丘陵斜面の断崖に袋状灰坑や石灰面の住居址、墓などが露出し、土器や石器が一kmほどの範囲に散布していること、墓には土坑墓、板石の石棺墓、甕棺墓があり、完形の土器は土坑墓、小型の玉器は石棺墓からしばしば出土すること、甕棺墓は大型の籃紋灰陶甕を合わせ口にしていること、採集された土器は客省莊第二期文化に近いが、玉器はそれと同時期もしくは殷代に下る可能性があることを報告している。戴氏は一九七九年まで調査を継続し、計一

二七点の玉器を収集したほか、^②中国社会科学院考古研究所の張長寿氏らも踏査と玉器の収集をおこなっている。^③その後、一九八一年に西安半坡博物館が三地点を試掘し、住居址二基、灰坑一基、石棺墓四基、甕棺墓一基を発見した。^④また、このときの調査によつて、遺址の面積は約五〇〇〇m²あり、住居址や灰坑などの居住区は遺址の中央に、石棺墓や甕棺墓などの墓地は遺址の東北部にあることが明らかになった。そして、報告では、出土土器からみて居住遺址の年代は客省莊第二期文化でよいが、墓地の年代は二里頭文化に併行する内蒙古准格爾旗大口遺址第二期文化と同時代で、墓地から出土する玉器もそれと同時代に比定できると指摘している。

発掘された二号石棺墓を詳しくみてみよう（図10）。村民の密洞によつて一部破壊されているが、墓坑は長さ一・九m、幅〇・八m、深さ一・八m、板石が数枚重なつた下に卵形三足甕と大型缸を合わせ口にした甕棺があつた。これは日本ではいう石蓋甕棺墓に相当する。大型缸は下半部が破壊されていたが、卵形三足甕のなかから頭骨や胸骨などの人骨のほか、胸の位置から緑松石珠が出土し、死者の腰の位置から夾砂灰陶の罍二点と罐一点、石庖丁形石刀一点が出土した。この石刀（図10の1）は長さ三五cm、二孔をもち、^⑤石峁遺址から多数採集されている石庖丁形玉刀と同じ

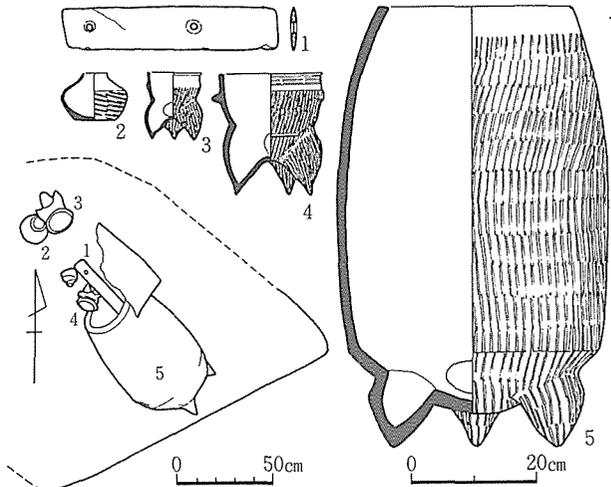


図10 石冢2号石棺墓

形であるところから、同時代の可能性が高く、玉刀の年代を決める手がかりとして重要である。

甕棺として用いられた卵形三足甕(図10の5)は、焼成の良好な泥質灰陶で、口径三一・八cm、高さ七〇cmの大型専用棺である。口頸部がやや内傾し、口縁端部は面をもち、胸部と底部の間には

稜がある。器壁は厚く、三足をふくむ外面の全面に粗い籃紋タタキ目がある。調査者がこの特徴的な土器をもとに大口遺址第二期文化に類似するとみたのは正しい。大口遺址は石冢遺址の東北一〇〇kmほどにあり、ここでも卵形三足甕は甕棺として用いられている。近年では同じような墓制が山西中部を中心に内蒙古・陝西の黄土高原にひろがっていることが確かめられ、この器種が山西中部の土器様式の指標としても注目されている^⑦。また、わたしは河南省焦作市府城遺址の調査のなかで、二里頭時代に太行山南麓までこの器種が搬入されていることを確かめている。このような最新の成果に照らして石冢の卵形三足甕をみると、器形と紋様が山西省汾陽県峪道河遺址の二号甕棺墓例にもつとも近似し、型式的には卵形三足甕の最初の段階に位置づけられる。ただし、この器種の出現については、龍山文化後期にさかのぼらせる意見とこれをもって二里頭時代の指標とする意見とが対立し、いまだ結論をみていない。

そこでこれと共伴した夾砂灰陶罍(図10の3・4)をみると、山西省忻州市游遊遺址H2の例に近似し、宋建忠氏はこれを二里頭文化第一期に併行する「東太堡文化早期」に編年している^⑩。また、石冢遺址の居住区から出土した土器の、沈線の三角形紋を刺突紋でうめる紋様(図11の1)は、内蒙古大口遺址(図11の2・

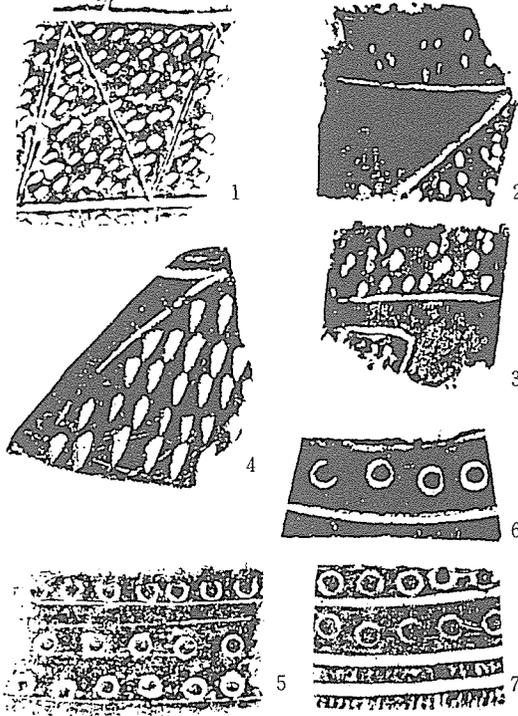


図11 二里頭時代の土器紋様（1・5 陝西石峁，2・3 内蒙古大口，4 山西白燕，6・7 山西東下馮）

3)のほか、山西省太谷県白燕遺址第四期(図11の4)や山西省太原市上莊村遺址^⑩でも出土し、竹管を押しつけたような列状円圈紋(図11の5)は、山西省夏県東下馮遺址^⑪の第一期(図11の6)から第四期(図11の7)以後にみられる紋様である。このような紋様は龍山文化後期の土器には例がなく、白燕遺址や東下馮遺址の編年をもとに二里頭時代に位置づけるのが妥当であろう。したがって、石峁遺址の居住区もその下限は二里頭時代におよび、居

住区と墓地とは龍山文化後期から二里頭時代にかけて同時に並存したものと考えられ、墓地から出土した玉器の年代についても、ひとまずこの範囲におさまるものと想定してよいだろう。そしてまた、石峁遺址は客省莊第二期文化にふくまれるとともに、山西中部を中心とした二里頭時代「東太堡文化」にもふくまれることが明らかになった。山西と陝北の黄河をはさんだ東西交流については、前章に中原龍山型玉璧のひろがりから示唆していたところであるが、以下に玉器を分析するうえで留意しておきたいとおもう。

石峁の玉器のなかで多数を占める玉牙璋と石庖丁形玉刀については、これまでも詳しく取りあげられてきた。ここではそれ以外の玉器について検討してみよう。

2 鷹形玉筭

鷹形玉筭とは、翼を折りたたんで静止する立鷹を丸彫りであらわした棒状の玉器で、石峁遺址からは二点が出土している。戴応新氏は最初それを「玉蝗」と「玉蜻螂」の名で報告し^⑫、後にはその後者について「玉鷹」と紹介している^⑬。いっぽう、台北故

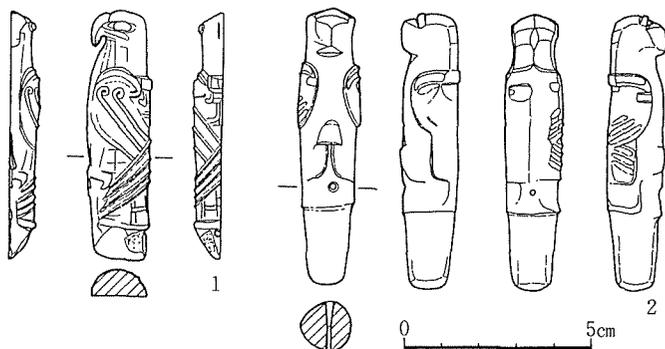


図12 陝西石峁出土の鷹形玉筴（石家河文化）

宮博物院の鄧淑蘋氏は、この二点は両方とも「玉鷹紋筴」と呼ぶべきもので、長江中流域の石家河文化や河南省安陽市の殷墟から類似が出土していることを指摘し、さらに、その凸線紋の技法と鷹のモチーフは龍山時代に華東（山東）から長江中流域に流行したもので、石筴の二点は華東ないしは華中からもたらされたものと推測した^⑩。

石筴で採集された鷹形玉筴A（図12の1）は、青緑色の玉で、縦に半切されて左半身だけが残っている。長さ

六・五cm。鈎状に曲がった喙、楕円形に突出した目をもち、後頭部には短く巻き上がる冠毛がある。冠毛の下、翼の間には刻紋がある。後ろに折りたたんだ翼は、右翼が左翼の上に重なり、翼の羽毛は凸線であらわされ、根元が渦状に巻いている。鋭い二本の爪をもつ足を刻紋であらわし、翼の下には格子状の尾羽根が陰刻されている。尾羽根の端は少し隆起し、その下に前面から穿孔した細い孔が貫通している。

鷹形玉筴B（図12の2）は、長さ七・〇cm、全体にいちじるしく摩滅し、冠毛の下の刻紋や足と尾羽根の刻紋はすべて看取できない。また、鈎状の喙や目の表現もはっきりしない。しかし、全体の形、とりわけ後頭部に短く巻き上がる冠毛、左翼の上に重なった右翼、凸線であらわされた翼の羽毛、足の表現とおもわれる前面の刃り込み、前面からの片面穿孔などの特徴は鷹形玉筴Aと完全に同じである。

このような鷹形玉筴は、長江中流域の石家河文化に数例があるほか、殷代の湖北省黃陂県盤龍城遺址や河南省淮陽県馮塘村、河南省安陽市小屯三三一号墓、同殷墟婦好墓などから出土し、わたしはこれをA型とB型の二型式に分けた^⑪。

すなわち、石筴の鷹形玉筴Aに代表されるA型は、鷹の目・鈎喙・足・尾羽根が明瞭に表現されるもので、なかでも石筴と小屯三三一号墓の例は冠毛と

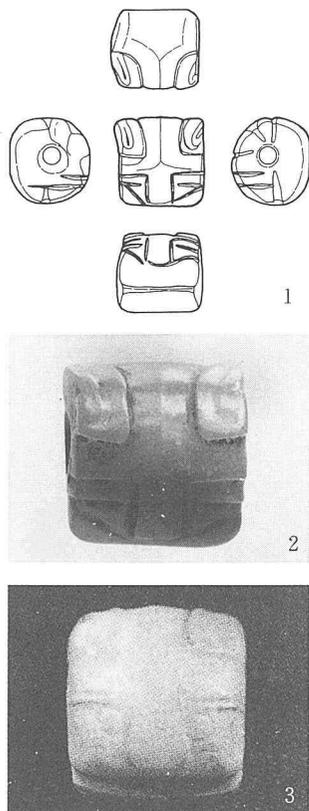


図13 石家河文化の玉虎頭
 (1・2 陝西石峁, 3
 湖北棗林崗W41) 1の縮
 尺1/2

石峁遺址から多く出土している、薄く
 挽き切られた玉牙璋や石庖丁形玉刀と
 関連するのであろう。石峁ではまた玉
 琮の一边を薄く挽き切った玉器も出土
 している(図14)。これは長さ二〇・
 〇cm、幅五・六cm、厚さ〇・四cmの扁
 平な長方形で、上部に一孔があり、両
 長辺の同じ位置に一三条の短い凹線を

翼との間に細かい刻紋をもつ点で共通する。いっぽう、石峁の鷹
 形玉筴Bに代表されるB型は、全体の形はもちろんのこと、後頭
 部に巻きあがる冠毛、左翼の上に重なった右翼、凸線であらわさ
 れた翼の羽毛、前面からの片面穿孔などの特徴はA型と一致する
 が、細部の描出が不鮮明となって全体に摩滅したような印象を受
 けるものである。年代が下るにつれて紋様が退化または省略化す
 ると仮定するなら、A型が古く、B型が新しいと推測されるが、
 現状ではそれを検証する資料がない。むしろ、より重要なことは、
 長江中流域の石家河文化後期にすでにA型とB型が並存し、そこ
 から一〇〇〇kmほど隔たった石峁にもA型とB型があり、それよ
 り数百年下った殷後期の殷墟にもA型とB型が並存していること
 である。

このような鷹形玉筴が石家河文化で一元的に製作され、そこか
 ら製品が中原や陝北に運ばれたことは、未成品や玉廢材の出土す
 る製作遺址が石家河文化に存在し、とりわけ鷹形玉筴の未成品と
 推定される「玉簪」が出土していること、鷹形玉筴の出土遺址は
 石家河文化がもっとも古いこと、同じような鷹の形象は石家河文
 化に少なくないのたいして、中原や陝北にはそれがほとんどみ
 られないこと、石家河文化に存在した鷹形玉筴のA型とB型の二
 型式がともに中原や陝北にも並存し、玉器工人の移動や技法の伝
 播は考えがたいこと、よって証明できる。そして、鷹形玉筴と
 ともに石家河文化の玉虎頭(図13)もまた石峁に運ばれているこ
 とをあげて、その傍証としたのである。

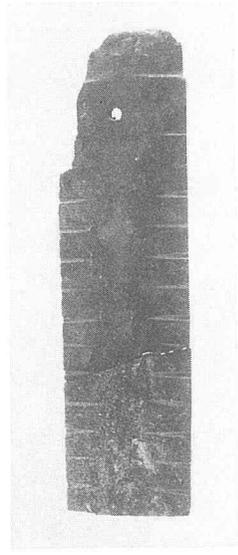


図14 石峁出土の玉琮切片（中原龍山型）

刻んでいる。戴応新氏はこれを「玉尺形器」と呼んで定規としての用途を推測しているが、¹⁸⁾前章にみた中原龍山型玉琮に相当するものだろう。台湾のコレクションにある玉琮の切片もまた中原龍山型のもので、四条の凹線を刻み、同じように上部に一孔をもつ¹⁹⁾このような薄く挽き切る所為について林巴奈夫氏は、地方首長の保有する玉器を王が従属のしるしとして取りあげて分割し、その半分を割符のようにもとの首長に返して支配・従属のあかしにしたと推測している。²⁰⁾ただ、鷹形玉筭や玉琮は外からの搬入品であり、良渚文化の玉琮には分割した二器が同一の墓から出土した例があることは、どのように解釈できるのだろうか。このような分割した玉器が陝北に集中し、他地域では少ないことをふくめ、今後に検討していく必要がある。

3 玉牙璧

牙璧とは、有孔円盤の周縁に削り込みをほどこした風車形の玉器である。石峁遺址からは三点が出土している。牙璧A（図15の1）は、一部に褐色の混じる乳白色半透明の玉で、玉質は鷹形玉筭や玉虎頭に近い。外径六・一cm、孔径三・五cm、厚さ〇・四cm。孔径が大きく、内縁からしだいに薄くなって刃状の周縁となるため、璧というより環というべき形である。周縁の三方を斜めに削り込んで牙をつくり、各牙の間に二ヶ所の浅い刻みをいれている。牙璧B（図15の3）は、牙璧Aと同じ玉質で、外径一〇・〇cm、孔径五・七cm、厚さ〇・四cm。孔径が大きく、周縁が刃状に薄くなった環形を呈し、周縁の三方に小さな牙をつくっている。牙璧C（図15の2）は、青緑色の玉で、楕円形の環状を呈し、外径は長径一一・〇cm、短径八・五cm、孔径は長径六・五cm、短径五・五cm、同じように孔径が大きく、周縁が刃状に薄くなっている。四方方向に牙をつくり、それぞれの牙の間には歯状の凹凸を刻んでいる。

牙璧について安志敏氏は牙の数によって四型式に分類したが、²¹⁾編年には、断面形、牙の形、歯状の凹凸の有無、大きさ、の四要素が重要であり、ここではつぎの二型式に大別する。すなわち、大汶口型は、周縁が刃状をなす環形で、牙の削り込みが鋭く、歯

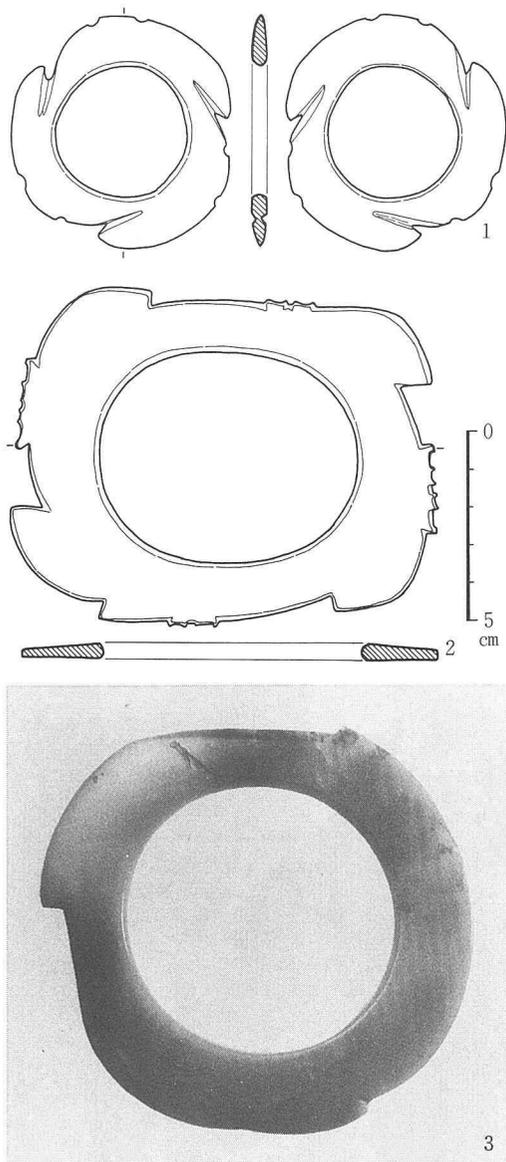


図15 石峁出土の牙璧

牙状の凹凸がなく、最大径が一〇cmをこえない小型品である。殷墟型は、内縁から外縁まで厚さの均一な壁形で、牙の割り込みが鈍く、周縁に歯牙状の凹凸があり、最大径が一〇cmをこえる大型品である。

大汶口型牙璧は、遼東半島に製作地のひとつがあり、大汶口文化後期から山東龍山文化前期に遼東から山東にも分布する。^②大汶口文化後期の山東省膠県三里河遺址^③の例をみよう。二七三号

墓の牙璧は、外径六・四cm、断面が長三角形を呈し、牙の方向が一定しない（図16の1）。二二九号墓の牙璧は、外径四・五cm、各牙の間に小さな突起がある（図16の2）。いっぽう殷墟型牙璧は、殷後期に下るもので、河南省安陽市小屯西北地一一号墓^④の牙璧は、外径二二・〇cm、孔径六・七cm、厚さ〇・四cm、三方に牙があり、各牙の間に歯牙状の凹凸がある（図16の3）。同小屯二二三号墓^⑤の牙璧は、外径二一・五cm、孔径四・六cm、厚さ〇・

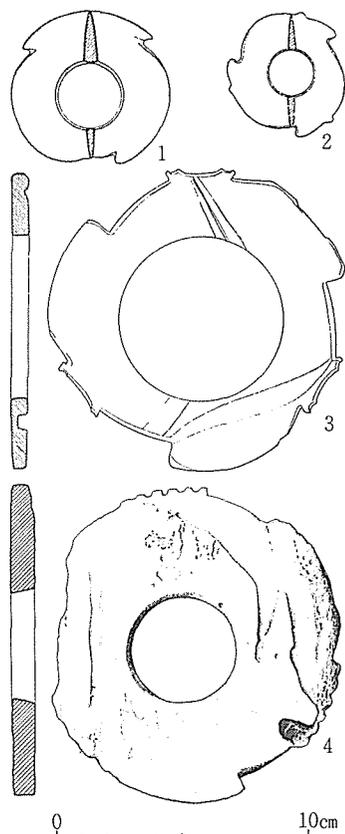


図16 玉牙璧（大汶口型；1・2 山東三里河，殷墟型；3 河南小屯西北地M11，4 河南小屯M232）

8cm、周縁の傷みがはげしいが、三方に牙があり、各牙の間に歯状の凹凸があつたらしい（図16の4）。

以上の編年により、牙璧は環形から璧形へ、牙の削り込みが鋭いものから鈍いものへ、小型品から外径が一〇cmをこえる大型品へ、歯牙状の凹凸の出現、という流れがみいだせる。この編年観をもとに石峁の玉牙璧をみると、牙璧Aは標準的な大汶口型に属すいっぽう、牙璧Bは牙の削り込みが鈍く、大きさが大汶口型の基準ぎりぎりであり、牙璧Cは牙の削り込みが鈍く、大型で歯牙状の装飾をもち、断面が璧形になるなど殷墟型により近い特徴をもっているため、牙璧Bと牙璧Cは大汶口型と殷墟型との中間に位置づけるのが妥当であろう。それを独立した一型式とみなすに

できるのではなからうか。

つぎに各型式の分布について考えてみよう。大汶口型牙璧は、遼東での製作が確実で、おもに遼東・山東に分布していることはすでに述べた。この型式は石峁のほかに、殷後期の河南省安陽市殷墟婦好墓^②からも出土している（図17）。それは外径六・1cm、孔径二・3cm、厚さ〇・3cm、三方に牙のある標準的な大汶口型であり、山東からもたらされ一〇〇〇年あまり伝世した古玉と考えられる。孔の一部が紐すれによっていちじるしく凹んでいるのは、その長い伝世を物語っている。殷・西周時代の大墓にはしばしば新石器時代にさかのぼる古玉が副葬されており、前節にみた鷹形玉筭と同じように、婦好墓の牙璧も龍山文化のうちに中原に

はまだ資料数が少ないわりに変異が大きいけれども、山東龍山文化後期の代表的な大型墓が発見された山東省臨朐県西朱封遺址でこの中間的な型式の牙璧二点が採集されている^③ことからみれば、それは山東龍山文化前期と殷代との間すなわち龍山文化後期から二里頭時代におおよそ位置づけることが



図17 殷墟婦好墓出土の牙璧（大汶口型）

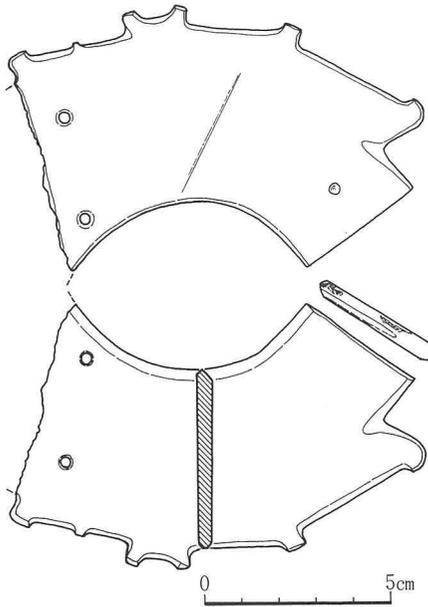


図18 石峁出土の歯牙状の凹凸をもつ玉器

もたらされ、石峁の牙璧Aはさらに陝北へと運ばれたのであろう。そして、その過程において牙璧の模作がはじまり、石峁の牙璧Bや牙璧Cのような大型化と歯牙状の装飾をほどこすようになったのではなかろうか。

石峁の牙璧Cにほどこされた歯牙状の凹凸は、龍山文化後期に出現し、その後に継承された装飾で、蘆山峁遺址の石庖丁形玉刀にも用いられていた。また、それは石峁のほかの玉器にも少なからずあり、そのひとつを図18に示す。これは扁平な牙璧形の玉を分割したもので、片側は自然に破断したため補修孔を一对あけ、

4 玉 戈

もういっぽうは人為的に切断し、片面には途中で放棄した穿孔がある。石峁の牙璧Cの年代を補強する資料になるだろう。

戈とは、柄にたいして直角に剣形の刃を装着する武器である。石峁遺址からは玉戈が一点出土している（図19）。黒褐色の墨玉で、長さ二九・四cm、身部（援）の幅六・〇cm、厚さ〇・六cm。長い援は両側辺がほぼ平行し、先が二等辺三角形を呈するが、仔細にみると、両側辺はかすかに内湾し、先端は丸みを帯びた茸形

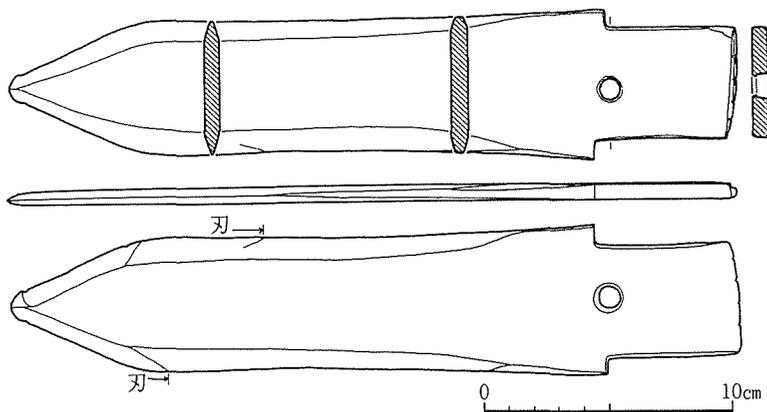


図19 石峁出土の玉戈

をなしている。援は両面とも平らな板状を呈し、先へとすだいに面取りの幅を加え、上刃は先端から六・四cm、下刃は一〇・一cmの長さにつくるだけである。基部（内）は長方形で、援との境に一孔をあけている。両面穿孔で、摩滅の痕跡はない。やや斜めに切られた内の端面は擦り切りの痕跡をとどめ、等間隔の刻みを四ヶ所にはどこしている。援と内の境は上下でわずかにずれており、柄にたいしてやや鋭角に戈が装着されるようになっていいる。実際に木柄に装着したか否かはともかく、上下非対称になるところは同時期の玉牙璋にも共通する特徴である。

この玉戈について、台北故宫博物院の楊美莉氏はつぎのようにいう。これまで発掘された戈のなかでは、河南省偃師市二里头遺址から出土した二里头三期の玉戈（図20の1・2）・銅戈（図20の3・4）がもっとも古いけれども、それはかなり完成された形である。その点で、龍山文化後期といわれる石峁の玉戈は古拙の趣があり、石峁で発達した玉牙璋をもとに創作されたのであろう^②。わたしはこの説に賛成する。それは石峁の玉戈が戈形器としてはもっとも古くさかのほるだけでなく、上述のように、援の両面とも平らで、先の四割ほどの長さしか刃をつけず、内と援との境に一孔をあけ、わずかに上下非対称につくる手法など、玉牙璋にきわめて近い特徴がみられるからである。とくに援の先だけに

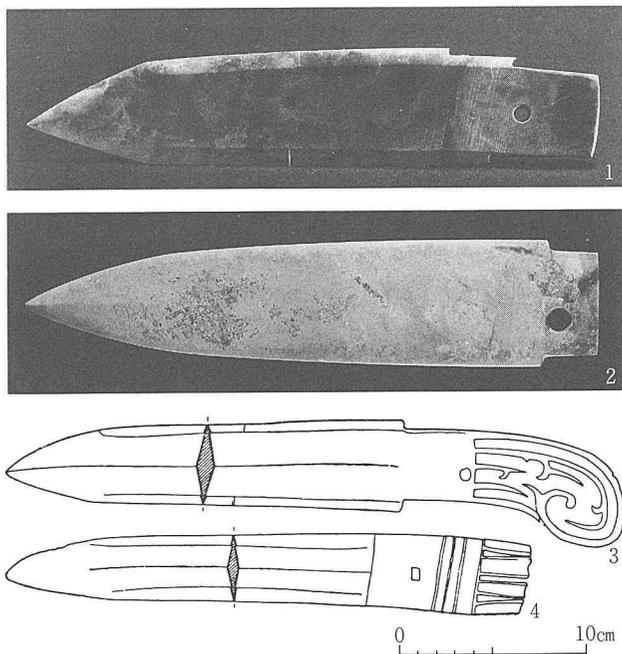


図20 二里頭文化の玉戈（1・2）と銅戈（3・4）

刃があり、上下で刃の長さがちがっていることは、今回、実測図を作成してはじめてわかったことであり、創出期の玉戈が玉牙璋と同じ機能をもっていた可能性を示唆している。これまで戈の起源について、さまざまな憶説が提出されてきたが、石峁の玉戈の発見によって、より確かな手がかりがえられたといえよう。

このような形の玉戈はほかに例がないため、それが二里頭文化の玉戈にそのままなっていくのかどうか、あるいは銅戈・石戈をふくめた戈形器の原形になったのかどうかは即断できないけれども、二里頭文化の玉戈・銅戈は援の両側辺が細長く平行している特徴は、石峁の玉戈を継承しているようにみえる。さらに、二里頭遺址で採集された銅戈（図20の4）は内に三条の深い切れ込みと横線があり、それはまた殷墟婦好墓など殷後期の玉戈に簡略化した形で受け継がれていくが、石峁の玉戈の内の端面にほどこされた四ヶ所の小さな刻紋はそのさきがけとなるものではなからうか。類例の増加をまちたい。

① 戴応新「陝西神木県石峁龍山文化遺址調査」（考古）一九七七年第三期）。

② 戴応新「神木石峁龍山文化玉器」（考古与文物）一九八八年

第五・六期)。

- ③ 張長壽「論神木出土的刀形端刃玉器」(『南中国及隣近地区古文化研究』香港中文大學中國文化研究所中國考古古藝術研究中心專刊八、一九九四年)。
- ④ 西安半坡博物館「陝西神木石峽遺址調查試掘簡報」(『史前研究』一九八三年第二期)。
- ⑤ 吉發習・馬耀圻「內蒙古准格爾旗大口遺址的調查與試掘」(『考古』一九七九年第四期)。
- ⑥ 注④の報告では、図キヤブション(図八の8)には「Ⅱ式石刀(M2・5)」とあるが、報文には「Ⅱ式・一件。標本M1・3」とあって一致しない。しかし、M1には副葬品がなく、Ⅱ式石刀はM2の一点だけであるから、それは報文の誤りと考えられる。また、報文にはこの石刀の長さは三・五cmと記されるが、報告図二と図八の縮尺からみて、長さ三・五cmの誤りと考えられる。
- ⑦ 秋山進午「山西省太原西郊王門溝出土の卵形三足甕」(『考古学研究』第三三卷第三号、一九八六年)、崔瑛「夏商周三代三足甕」(『考古与文物』一九九二年第六期)、張德光「岔溝陶甕与峪道河三足甕的時代問題」(『文物季刊』一九九四年第一期)、張斌宏・楊巧靈「蛋形三足甕初探」(『文物季刊』一九九七年第三期)。
- ⑧ 山西省考古研究所「山西汾陽縣峪道河遺址調查」(『考古』一九八三年第一期)。
- ⑨ 忻州考古隊「山西忻州市游遊遺址發掘簡報」(『考古』一九八九年第四期)。
- ⑩ 宋建忠「晋中地区夏時期考古遺存研究」(『山西省考古學會論文集』二、一九九四年)。
- ⑪ 晋中考古隊「山西太谷白燕遺址第一地点發掘簡報」(『文物』一九八九年第三期)。
- ⑫ 岡山大學文學部に保管する和島誠一發掘資料。上莊村遺址の土器は現在、城西國際大學の倉林真砂斗氏が借用中で、岡山大學ならびに倉林氏のご厚意により実見させていただいた。上莊村遺址は注⑦秋山論文に紹介された王門溝遺址に隣接し、多数出土した東太僕文化の土器のなかには二里頭文化からの搬入土器もふくまれている。
- ⑬ 中国社会科学院考古研究所編「夏東下馮」(文物出版社、一九八八年)。
- ⑭ 戴応新 注②論文。
- ⑮ 戴応新「神木石峽龍山文化玉器探索(完結篇)」(『故宮文物月刊』第一一卷第一〇号、一九九四年)。
- ⑯ 鄧淑蘋「也談華西系統的玉器(六)」(『故宮文物月刊』第二一卷第一〇号、一九九四年)。
- ⑰ 岡村秀典「公元前二千年前後中国玉器之拡張」(『東亞玉器(East Asian Jade: Symbol of Excellence)』第一卷、香港中文大學、一九八八年)。
- ⑱ 戴応新 注⑮論文。
- ⑲ 一九九七年に北京大學サックラー考古古藝術博物館で開催された台湾震旦文教基金會の展覧による「中国古代玉器工藝教學標本展」の資料。
- ⑳ 林巴奈夫「中国古玉の研究」(吉川弘文館、一九九二年)。
- ㉑ 安志敏「牙璧試析」(『東亞玉器(East Asian Jade: Symbol of Excellence)』第一卷、香港中文大學、一九九八年)。
- ㉒ 岡村秀典「中国先史時代玉器の生産と流通——前三〇〇〇年紀の遼東半島を中心に」(『東アジアにおける生産と流通の歴史社會学的研究』、中国書店、一九九四年)。
- ㉓ 中国社会科学院考古研究所編「膠嶼三里河」(文物出版社、一九八八年)。
- ㉔ 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「一九七六年安陽小屯西北地

発掘簡報」（考古）一九八七年第四期。

②⑤ 石璋如「小屯」（第一本・丙編・三・南組墓葬、中央研究院歷史語言研究所、一九七三年）。

②⑥ 安志敏 注②論文の図5・3にはほぼ同形の玉牙璧一点が発表されている。

②⑦ 中国社会科学院考古研究所編『殷墟婦好墓』（文物出版社、一九八〇年）。

②⑧ 林巳奈夫「殷墟婦好墓出土の玉器若干に対する注釈」（『東方学報』京都第五八冊、一九八六年、注②書に再録）。

②⑨ 楊美莉「中国古代的『玉兵』戈形玉兵器系列之一」（『故宫文物月刊』第一五卷第一号、一九九七年）。

三 中原・陝北への玉器の流れ

紀元前三〇〇〇年紀の龍山時代、中国の各地に独自の土器文化が並立すると同時に、相互交流がしだいに密接になっていった。

小論では陝北から出土したいくつかの玉器をとりあげ、その源流を探るとともに、それらがどのようにして僻遠の陝北にもたらされたのかを考えてみた。ここでそれをまとめながら、龍山時代の地域間交流の側面を明らかにし、さらに龍山文化後期に広域にひろがった玉器が二里頭時代以後にどのように展開していったのかを素描してみたい。なお、蘆山峁遺址と石峁遺址の年代は、龍山文化後期から二里頭時代前期、およそ前二〇〇〇年前後と考え

ている。

まず玉琮は、前三〇〇〇年ごろ長江下流域の良渚文化に出現し、この良渚型をもとに、龍山文化後期の黄河中流域に中原龍山型、黄河上流域に齐家型が相次いで生成する。蘆山峁から出土した二点の玉琮は、ともに良渚型に属しているが、そのうち玉琮Bは良渚型の製品が江南から運ばれてきたものであるのたいして、玉琮Aは良渚型の一次模倣であり、このような模倣の反復と紋様の簡略化によって二次的に中原型玉琮が生みだされたと推測できる。また、石峁出土の縦に挽き切られた玉琮剝片は中原龍山型に属し、中原からの搬入品と考えられる。

玉琮と同じように玉璧も前三〇〇〇年ごろ長江下流域の良渚文化に出現し、この良渚型をもとに、龍山文化後期の黄河中流域に中原龍山型、黄河上流域に齐家型が相次いで生成する。東から西への玉璧のひろがりには、いままでのところ各型の分布が交錯する現象はみられず、形態情報の伝播によるものと考えられる。ただし、陝北では、蘆山峁の二点と石峁の一点、および石峁の北にある新華遺址の二点の計五点が中原龍山型に属し、蘆山峁の玉璧C一点のみ齐家型である。関中の省骨莊二期文化には齐家型の玉琮・玉璧が分布しているが、陝北ではそれは劣勢である。

二里頭時代の玉琮・玉璧は確実な発掘例がほとんど知られてい

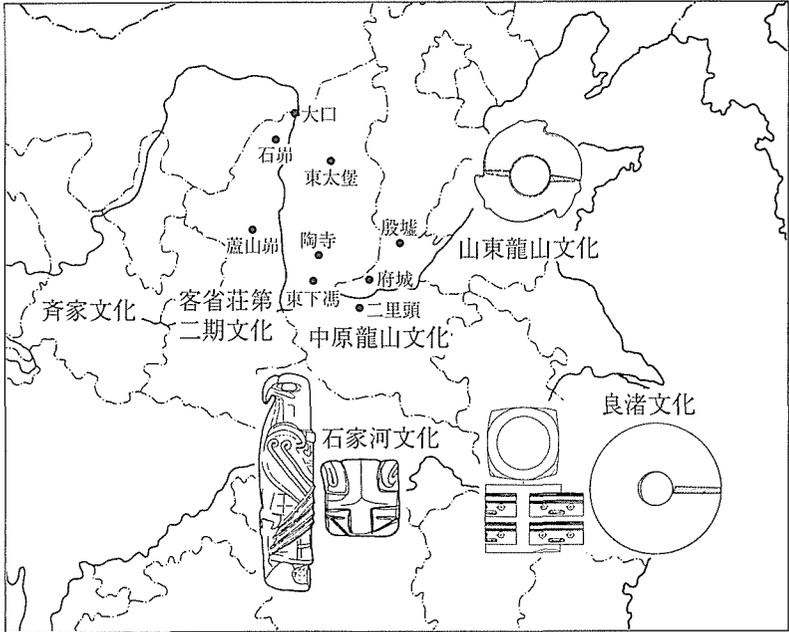


図21 陝北出土玉器の源流とその関連遺址

ない。つづく殷代になると、数はあまり多くないが、ふたたびそれが発現する。その形は玉琮・玉璧ともおおむね中原龍山型を継承しているようにみえるが、玉琮のなかには河南省安陽市侯家莊一〇〇四号墓例のように齊家型に近いものがある。

石峁から出土した鷹形玉筭と玉虎頭は、長江中流域の石家河文化後期につくられ、そこから搬入されたものである。そのうち鷹形玉筭Aは縦に半切されている。鷹形玉筭は長江中流域のほか、黄河中流域の殷墓からも出土しているため、中原を経由して龍山文化後期のうちに石峁にもたらされたものと考えられる。形が複雑なためか、この模倣品はなく、後代にも継承されていない。また、二里頭時代の確実な発掘例がないことは玉琮・玉璧と同じである。

玉牙璧は前三〇〇〇年紀前半の遼東・山東に玉環の変形として大汶口型牙璧が生まれ、殷代には歯牙状の裝飾をもつ殷墟型牙璧が出現する。大汶口型牙璧には製品が中原や石峁まで運ばれ、殷後期まで伝世したものが、また石峁の牙璧Bと牙璧Cはその中間的な型式に位置づけられるため、龍山文化後期に大汶口型を継承する玉牙璧が製作されたものと考えられる。しかし、二里頭時代には確実な発掘例がない。

以上のように、龍山時代の遼東・山東から長江中・下流域に起

源する玉器は、それぞれの地域でつくられた製品が中原や陝北にもち運ばれ、その一部は殷代まで伝世するとともに、玉琮・玉璧・玉牙璧は形の模倣をもとに中原龍山文化のなかで独自の型式がつくりだされたのである。玉琮・玉璧はまた西のかた齊家文化でも独特な型式が誕生している。そして、いずれも二里頭時代には姿をみせないが、玉琮・玉璧・玉牙璧は殷後期に以前からの系譜につながる型式が再発現したのである。良渚文化の獸面紋と殷周時代の饗鬃紋とを結びつけ、良渚文化の消滅・移住・玉器の拡散を想定する説がかつてあつたけれども、それはあまりに短絡的であつて、実際は江南と中原との間にかぎらず、龍山時代にはさまざまな地域の間で多様な交流が展開されたのであり、そのなかで中原は周辺地域の文化を積極的に吸収し、殷周時代につながる独自の文化を醸成していったと考えられよう。

このような中原周辺の地域に由来する玉器にたいして、玉戈は中原もしくは陝北の龍山文化後期に玉牙璋を原形として誕生し、二里頭時代に盛行したものである。玉戈は石峁と二里頭遺址から多く出土している玉牙璋・石庖丁形玉刀とも時間的に併行し、また大型の有刃器で、おもに墨玉でつくられたという点でも共通する。ただし、二里岡文化以後、玉牙璋と石庖丁形玉刀は中原ではほとんど跡を絶ってしまうというふう、武器形の玉戈だけはその後

に存続しているというちがひがある。しかし、玉牙璋と石庖丁形玉刀に交代するかのようには、中原で玉琮・玉璧・玉牙璧などが再発現するのはなぜか、その理由はよくわからない。今後の課題である。

陝北出土玉器の製作地について、蘆山峁遺址を調査した姫乃軍氏は、延安の北にある子長県や安塞県には玉の産地があり、とくに子長県では墨玉を産出するという^③。管見のかぎりでは、陝北の玉器には少なくとも墨玉と青玉の二種類があり、前者は大型の有刃器、後者は玉璧などの裝飾的な玉器に用いられることが多い。大型の有刃器が石峁から多数出土していることからみれば、子長県に産する墨玉を用いて陝北で製作された可能性が大きいが、製作遺址の発見がまたれる。龍山文化から二里頭時代における中原と陝北との地域間関係をふくめ、今後の課題であろう。

① 梁思永・高去尋『侯家莊』(第五本・一〇〇四号大墓、中央研究院歴史語言研究所、一九七〇年)。

② 蘆山峁遺址や山西省陶寺遺址では、良渚文化に特徴的な「し」字形大型石刀が出土し、その交流が玉器のような威信財にとどまらなかったことがわかる。

③ 姫乃軍「延安市蘆山峁出土玉器有關問題探討」(『考古与文物』一九九五年第一期)。

おわりに

一九八〇年代以後、良渚文化と紅山文化の玉器のめざましい発見によって、殷周時代に先行する玉器が注目されるようになった。しかし、黄河中・上流域の玉器については、現地の研究者を中心に調査がすすめられ、近年では台湾の研究者が着目するようになってきたものの、玉器の多くが正式の発掘品ではなく、詳細な報告が少ないためか、日本ではその関心がひじょうに薄いようにおもわれる。

小論では陝北から出土した玉器のいくつかをとりあげ、その源流が遠く山東や長江中・下流域にあることを明らかにした。また、龍山文化後期に玉器の製品が遠くまでもち運ばれたり、形の情報が広域に伝播して模作された結果、中原龍山文化や齊家文化に独自の玉器が誕生し、二里头文化以後の玉器に継承されたことを推測した。

しかし、なお多くの問題が残されている。陝北は今世紀における革命を推進した中心地であるが、その地理的な制約のために、前近代の中国史において主導的な役割を演じたことはなかった。その陝北にはるばる一〇〇〇km以上の道のりを玉器はなぜ「長征」し、これだけ多様な系統の玉器が吹き溜まりのように集中す

ることになったのか、それは依然として謎のままである。また、その玉器がどのようにして二里头文化以後の玉器に継承されていたのか、とくにそれは中国初期王朝の誕生「革命」の時期にあたるだけに、さらに詳細な検討を積み重ねる必要があろう。

挿図出典 出典を明記していないものは筆者の作成による。

- 図4 1 『東亜玉器』第三卷(香港中文大學、一九九八年) 図64
- 図4 2 『東亜玉器』第三卷(香港中文大學、一九九八年) 図63
- 図5 1・2 浙江省文物考古研究所「余杭瑤山良渚文化祭壇遺址発掘簡報」(『文物』一九八八年第一期) 図14
- 図5 3・4 南京博物院「一九八二年江蘇常州武進寺墩遺址の発掘」(『考古』一九八四年第二期) 図9
- 図6 1 『東亜玉器』第一卷(香港中文大學、一九九八年) 図24・2
- 図6 2・3 『東亜玉器』第一卷(香港中文大學、一九九八年) 図20・1
- 図8 1・2 南京博物院「一九八二年江蘇常州武進寺墩遺址の発掘」(『考古』一九八四年第二期) 図8
- 図8 3 『東亜玉器』第三卷(香港中文大學、一九九八年) 図66
- 図8 4 延安市文物管理委員会資料。
- 図8 5 『東亜玉器』第三卷(香港中文大學、一九九八年) 図67
- 図10 西安半坡博物館「陝西神木石峁遺址調査試掘簡報」(『史前研究』一九八三年第二期) 図2・図4・図5・図8をもとに筆者作図。
- 図11 1・5 西安半坡博物館「陝西神木石峁遺址調査試掘簡報」(『史

- | | | | | | |
|------|-----|---|------|-----|---|
| 図 11 | 2・3 | 前研究「一九八三年第一期」図3
吉發習・馬耀圻「内蒙古准格爾旗大口遺址的調查与試掘」(考古)一九七九年第四期) 図8 | 図 16 | 1・2 | 中国社会科学院考古研究所編『膠東三里河』(文物出版社、一九八八年) 図25 |
| 図 11 | 4 | 晋中考古隊「山西太谷白燕遺址第一地点發掘簡報」(文物)一九八九年第三期) 図10 | 図 16 | 3 | 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「一九七六年安陽小屯西北地發掘簡報」(考古)一九八七年第四期) 図8 |
| 図 11 | 6・7 | 中国社会科学院考古研究所編『夏鼎東下馮』(文物出版社、一九八八年) 図26・図123 | 図 16 | 4 | 石璋如『小屯』(第一本・丙編・三・南組墓葬、中央研究院歷史語言研究所、一九七三年) 図版37 |
| 図 13 | 3 | 院文清「石家河文化玉器概論」(故宮文物月刊)第一五卷第五期、一九九七年) 図八 | 図 17 | | 中国社会科学院考古研究所編『殷虛婦好墓』(文物出版社、一九八〇年) 図版86・4 |
| 図 14 | | 戴応新「神木石峁龍山文化玉器探索(完結篇)」(故宮文物月刊)第一卷第一〇号、一九九四年) 図144 | 図 20 | 1 | 陳志達・方国錦編『中国玉器全集2 商・西周』(河北美術出版社、一九九三年) 図版8 |
| 図 15 | 2 | 『東亞玉器』第一卷(香港中文大学、一九九八年) 図5・4 | 図 20 | 2 | 陳志達・方国錦編『中国玉器全集2 商・西周』(河北美術出版社、一九九三年) 図版9 |
| 図 15 | 3 | 戴応新「神木石峁龍山文化玉器探索(完結篇)」(故宮文物月刊)第一卷第一〇号、一九九四年) 図132 | 図 20 | 3・4 | 中国科学院考古研究所二里頭工作隊「偃師二里頭遺址新發現的銅器和玉器」(考古)一九七六年第四期) 図3 |
- (京都大学人文科学研究所助教)